□書　評□

「大腸内視鏡挿入法　ビギナーからベテランまで」

秋田赤十字病院胃腸センター　工藤　進英　著

東京大学医学部腫瘍外科

武　藤　徹一郎

1970年冬，筆者は町田製大腸内視鏡を携えてSt. Marks病院を訪れていた．わずか70 cmで先端の可動性は2方向．吸引装置も内蔵していない，今からみればどうみても大腸内視鏡とは呼べないような代物であったが，勇敢にもこれを用いてDr. C. Williamsと病院内で内視鏡検査を始めたのである．経験者ぶってはみたが，筆者は日本でたった5回の大腸内視鏡検査を経験したにすぎず，Rsを越すことすらおぼつかなかった．2人の間には自然に10 minutes rule（10分間たっても前進しない場合は役割を交代する）が成立し，何度も役割を変えて検査をしたものである．オリンパス製スコープが入って右半結腸への挿入が可能になったが，盲腸に到達するまでがまた一苦労であった．挿入法はとにかく押しの一手で，トルク操作やpull back操作などは全く知らされていなかった．挿入法を教えてくれる人も成書もなく，ループ形成を阻止する目的で鉗子孔に入れたピアノ線（弾性があって硬いのに目をつけたWilliamsの発案）が，スコープの外側に突き出しているのを透視スクリーンでみて胆を冷やしたこともあった．1972年，Londonからの帰りにMt. Sinai病院にDr. Shinyaを訪れてpull back操作やトルク操作に接し，目が洗われる思いがした．親友のDr. Williamsに直ちにその詳細を手紙で知らせたことはもちろんである．

あれからほぼ四半世紀が経ち，上述のごとき状況で大腸内視鏡検査を始めた者にとって，本書のようにすばらしい技術書が出版されたことに，深い感慨を覚えずにはいられない．あのころ，このような成書があればどんなに助かったことであろう．今さら紹介するまでもなく著者の工藤氏は表面型大腸腫瘍のワールドリーダーであり，既にそれに関する2冊の名著を著している．表面型のごとき微小病変をたくさん発見するためには，それを支える優れた挿入技術が必要不可欠であるが，そのノウハウが本書に余す所なく記されている．従来から，挿入法の解説書は数多く出版されているが，本書のごとく簡潔かつ実際的で，ポイントを押さえた解説書は類を見ない．ふんだんに挿入されているシェーマが実に要を得ていてわかりやすく，簡潔な記述とともに読者の理解を容易にしている．著者もあとがきで述べているように，名手が無意識のうちに行っている操作のエッセンスを，言葉にして人に伝えることは至難の業であろう．挿入術は1つのアートであるから，その本質を言葉で伝えることはほとんど不可能に近いが，本書では優れたシェーマの力を駆使してその不可能を可能にしている．著者ならびにその若い門下の諸氏の情熱と工夫とが，この難事を克服したことに敬意を表したい．

かつて大腸内視鏡検査に熱中した筆者にとって，本書の記述の内容は1つ1つ納得ができ，かゆい所にもよく手の行き届いた説明に満ちていて嬉しくなる．経験の多少を問わず読者はとにかく一度通読して，自らの技術をチェックしてみるとよい．それによって自らの技術レベルが明らかになるだろう．筆者も初めからone man method派であり，pull back操作やトルク操作を活用してほとんど本書の記述内容と同じテクニックを使っていたが，やはり著者のように上手に挿入できてはいなかった．著者によれば挿入レベルは1から4まであるが，筆者はベストのときでレベル3と4の間くらいかなと自己採点してみた．“読むとやるとは大違い”で，本書を読んだからと言って直ちに名手にはなれないが，名手を目指すための確実な道標となることは間違いない．挿入技術の向上と普及が大腸疾患の診断・治療に及ぼす影響は計り知れないものがあり，その意味での本書の果たすであろう役割は極めて大きいと思われる．本書を読んで，しばらく離れていた大腸内視鏡にまた挑戦してみたいという気になってきた．

経験数のいかんを問わず，大腸内視鏡検査を行っている人，これから行わんとする人のすべてに勧めたい本である．

● B5　頁134　図20　写真3　カラー写真78　原色図3　2色図24　表3　1997　定価（本体12,000円＋税）　〒400

医学書院　刊（☎03-3817-5657）

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2012

2026/09/25 01:10:13